
恋、もう一步。

るる姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋、もう一步。

【Nコード】

N1271G

【作者名】

るる姫

【あらすじ】

春から南湯原中学校に入学する事になった瑠莉亜。そこで出会った新たな友達と、純愛と共に育っていく成長ストーリー。

君と出逢えた奇跡。(前書き)

初めまして。

今回初めて投稿する、るる姫です。

この小説は清純ストーリーです。

少しでも共感でもしてもらえたら…と思って考えた物語です。
よかったら少しだけでも読んでもらえたら嬉しいです。

君と出逢えた奇跡。

- プロローグ -

ありがとう。

君と出逢わせてくれた奇跡。

君と出逢えた奇跡。

全てに感謝します
…。

「瑠莉亜、ほら前見て。桜咲いてる」
「ん…あと何分？」

「…あと10分くらい。」

「瑠莉亜、知り合いの子いた？」

「…いない」

南湯原中等学校、行く子聞いたことないし…。

「…そう…講堂行く」

「うん…」

つまらない。

何もかも…

「…」

「…ねえ君さ、ドコから来たの？」

小声で話してきたのは偶然隣になった女の子。

「北川小」

「あーあそこかあ北川から来てる子少ないよね？」

「…」

ウザったい。

あたし仲良くなる気ないし…。

て言うかなりたくない。

「…あ、あの子見てよ！新入生代表のっ…」

新入生代表？

試験で一番の人って事？

『高橋伊織です…新入生を代表し

…』

高橋伊織？

なんか女みたいな名前。

女子共に黄色い声でキヤーキヤー騒がれてぞ。

「君の名前は？」

「…瑠莉亜。美園瑠莉亜。」

「可愛い名前ね！！私は木山柚葉。あの伊織と同小。」

別にアンタの名なんて聞いてないんだけど…。

「…これで入学式を終わります。新入生は速やかに各自教室に…」

「ねー」「あっ知ってるー」「でしょー!？」

多分同じ小学校の子と話してるんだろっな…

あたしの席は出席番号だから一番後ろの窓際の…

あつ式の時も出席番号だったからあの木山柚葉と隣…ま、席替えするよね。

カタン…

知らない人たち

新しい校舎

新しい机と席

頭の中がいつぱい
…

「あ…君北川の子？」

「え？」

いきなり話しかけてきたのは…男子？誰？

「俺神楽雄輝。君去年の運動会で旗上げる役やってたでしょ？」

「え…やったけどそんなのよく覚えてるね…？」

どんな記憶力だ…

「だってある意味一目惚れだったし？」

「えっ！？」

「席着けーホームルーム長いからなー」

「ははっ！！これからよろしくなー」

からかわれた！？

同小の子いたなんて…

う…嘘だよね！？

「あ、瑠莉亜ちゃん！」

「…」

この中学校生活、つまらなくはない、かも。

続く

第二話 演劇部

「席替えするぞー…んじゃくじ引いて…」

いい席だったのに…

静かな人が隣がいいなあ…

少なくとも木山柚葉よりは…。

そう言えば高橋伊織って…

…このクラスに…

いたし…

て言うか何故にあたしたちの方がくじを引きに行かなきゃいけないの!?

…む。

…どねにっしゅっ…

一番下の…

ドキドキと胸の鼓動が高まっっていく。

ペリ…

18番…

三列目の一番左…

17番の名前は…

たっ…高橋伊織!?

…最悪

誰かに交換して、なんて…

あ、木山柚葉…

ちらっと見ると4番。

隣は…神楽雄輝…

…運命はこれしかないか…

まあ静かな人だよな…。

「えっと美園瑠莉亜さん？だよな…？」

高橋伊織…

「うっ…うん…高橋伊織君…だよな」

「よく知ってるね、僕の名前なんか…」

だってあんた新入生代表でしょ…

「よろしく」

なんか気取ろうとしないけど心の中は分からない…
超自意識過剰かも知れないじゃない！？

…苦手だ。

「なあー今日一緒に帰るっしょー？」

「…えー…」

「何？何か用事？」

神楽雄輝…

ウザい！！

…結局こうなるの？

ウザいコンビ2人と…！！

木山柚葉・神楽雄輝。

「ねっカフェ行こうよー」

「ゲーセン行こゲーセン！！」

なんで入学式の帰りにゲーセン行かなきゃいけないの…

「…カフェで」

「瑠莉亜は部活入る？」

呼び捨てかよ…

でも部活かあ…

「…考えてない」

「じゃ俺と一緒に演劇部入ろうよ〜!!」

「なんであたしがっ…」

演劇部

演劇部…か…

「…うー…ん」

やってみようかな…? ?

「やろっ…かな」

「じゃあ私も入るっ…」

「ダメ。定員。」

「えー！！やだあー」

《次の日》

「じゃあ仮じゃなくていいんですね？では入部届にサインを…」

カチっ…

美・園…瑠…莉亜…と。

「えっとじゃあ改めて紹介を。私は部長の東海林唯。よろしく。」

「は…はい」

「よろしくお願いしまーす」

「じゃあまず最初は練習だから君達は見えて」

「はーい…」

なんか知らない所だから？
無性にドキドキする…

「今は白雪姫の練習してるの。これ台本。悪い所とかあったら言うて？」

「はい…」

「じゃあシーン3のBから！」

シーン3…

台本をパラパラと捲っていきシーン3のBを探した。

…あつた、えーとリングをあのお女からもらつシーンか…

「『白雪姫さん扉を開けてくれ。』」

白雪姫…って誰が演じてるの？

キャスト…

「『はい、何かしら？あらなんて美味しそうなお林檎なんでしょう！貰ってもいいのかしら？』」

ドキッ…

すごく…綺麗な人。

顔が火照りそうなくらい笑顔に惹かれる。

白雪姫…

キャスト…

キャスト

白雪姫・高橋伊織

…は？

続く

第三話 高橋伊織

しっ…

あの白雪姫が高橋伊織？！

う…嘘…

あれどう考えても女子じゃん！！しかもトップクラスの…っ！！！！

…なんかだまされた気分なんだけど…。

「なああれ本当に男なのか？！」

小声で話しかけてくる神楽雄輝。

私も思ったわよ…

「…」

ふと右を見ると見入って目が離せない様子の木山柚葉。
…見惚れてる？

伊織、伊織。こつちを向いて…

私の知ってる伊織…もういないじゃない…

そう言ってるような、目を潤ませながら高橋伊織の少しの動作も、
木山柚葉の目はじっと、視線は少しもずれなかった。

その悲しそうな瞳に、私も見入ってしまった。

見入ってる内に、神楽雄輝の声もだんだん聞こえなくなっていくた。

「…はいつ終わり！」

はっと木山柚葉の目がいつもの目に戻った。

「あ…あはっ！楽しかった…ね？」

「…うん」

いつもの元気が感じられない。

間違いなく恋だろう。

「あ、美園さんに…柚葉？」

そっか。二人は同小だったから、少しは仲いいはずだよな。

「…やっぱり伊織は…演技だけねッッ！！」

「…うるさいなあ柚葉…」

あ、少し本気で怒ってる。

感情が顔に出やすいのね…

や、なんで高橋伊織を観察しなきゃいけないの…

「美園さん演劇部入るんだね。部でもよろしくね」

「…はあ」

うう…これじゃあほぼ学校では一緒かあ…

「…」

うわ…一回高橋伊織と話しただけで超無愛想…

どんだけ好きなの…。

なんだか面白そうな恋愛関係…

ま、でも高橋伊織と学校の大半を過ごすのは変わらないけど…。

続く

第四話 私の恋？

「なー、瑠莉亜って恋したことある？」

「は？」

何コイツ…何舞台の大道具の準備中に話しかけてくるの？！

「…ただけど」

声を窄める。

どうせ遅いって言うんでしょ…

小学校でも何度言われたことか…

「じゃー瑠莉亜が俺に恋したら初恋じゃん??？」

は？

どんな思考回路??

つかそれ…

「可能性0だけど…」

「えー10%はくれよー」

そゆ問題じゃないでしょ。

でも…

「初恋、まだなのバカにしないんだ？」

「なんでバカにすんの!!! LOVEの相手バカにしねーよ!!!」

らっ
…

本気なの…？

「それ、本気？ふざけじゃなくて…」

「えーじゃあ運動会の事なんで覚えてるのさー！」

まあ、そうだよね…。

でも、言葉の…一つ一つに安心出来る。

本当は、きっと軽くない。

「…ありがとう」

「え?!何なんで?!?!」

「…美園さん」

私？だよな？この声…は…あ…。

高橋伊織っ！！

「は…はい？」

「ちょっと着付け…してくれるかな？」

あ、そういえば少し髪がアレンジされてる…

確か今回の舞台はアラジンだっけ…

高橋伊織は久しぶりの男役だから違って見える。

ちょっと服にラメ付いてる…。

かっこいい…や、よくない。

いつも見ないから驚いただけ！

「はい、じゃあ部屋に…」

部屋につくと、何着もの服がハンガーにかかって並べられている。

「確か最初はこの服ですよね…」

服に手をかけ、少し神楽雄輝の事を考えながら服を手に取り、高橋伊織に渡した。

「じゃあ私出てるね」

ドアに手を掛けた瞬間反対の腕が掴まれた。

「待って」

…え？

「な…なんですか？」

ジロっと、上を見上げる。

高橋伊織、背高っ…

「…好きだって言ったら…ぎゅぎゅするっ。」

…はあああああ？?!?!?!?

続く

第五話 本当の要危険人物

うっえっ…

どっなってんのー!?

高橋伊織に告白されて神楽雄輝が本気だって分かって…

告白？

「…告白?!演技の練習とかじゃなくて?!」

「…うん」

顔をすっと横を向き、顔が赤く染まっていった。

ほ…本気で…？

私…私は…

「…やっぱり…私好きな人なん…」

「伊織ッ！！あと4分で開演す…」

木山 柚葉！！

掴まれた手

赤らんでる高橋伊織

壁に寄りかかっている私

…完っ全にばれる!!

「…ほ ほん高橋伊織行ってよ!! 始まっちゃっつじゃん!!…!!」

「…あ、ああ。」

バタンっ…

…怖い

「…何かあったの?」

うわっ……声のトーンめっちゃ低っ!!

「いや…何も」

しんとした室内の中木山柚葉は睨んでくる。

何かあったんだろと言わんばかりの目で。

「…あっそーだ…」

やっと沈黙が消えた…

「…何？」

「実は…ジャスミン役の唯先輩が熱でてめまいがしてどうしても舞台にも立てない状態で…」

「…だから？」

嫌な予感が背中をよぎる。

「だ…代役は一番唯先輩が言うジャスミンの役にいいって言つ瑠莉亜が…
セリフとかはカンペをするようにつて…」

う
… っそ!!

「瑠莉亜が…代役

…。」

予想の中…!!…!!

てか、本気で……?!

…アラジン…

高橋伊織だよな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271g/>

恋、もう一步。

2010年10月9日00時06分発行